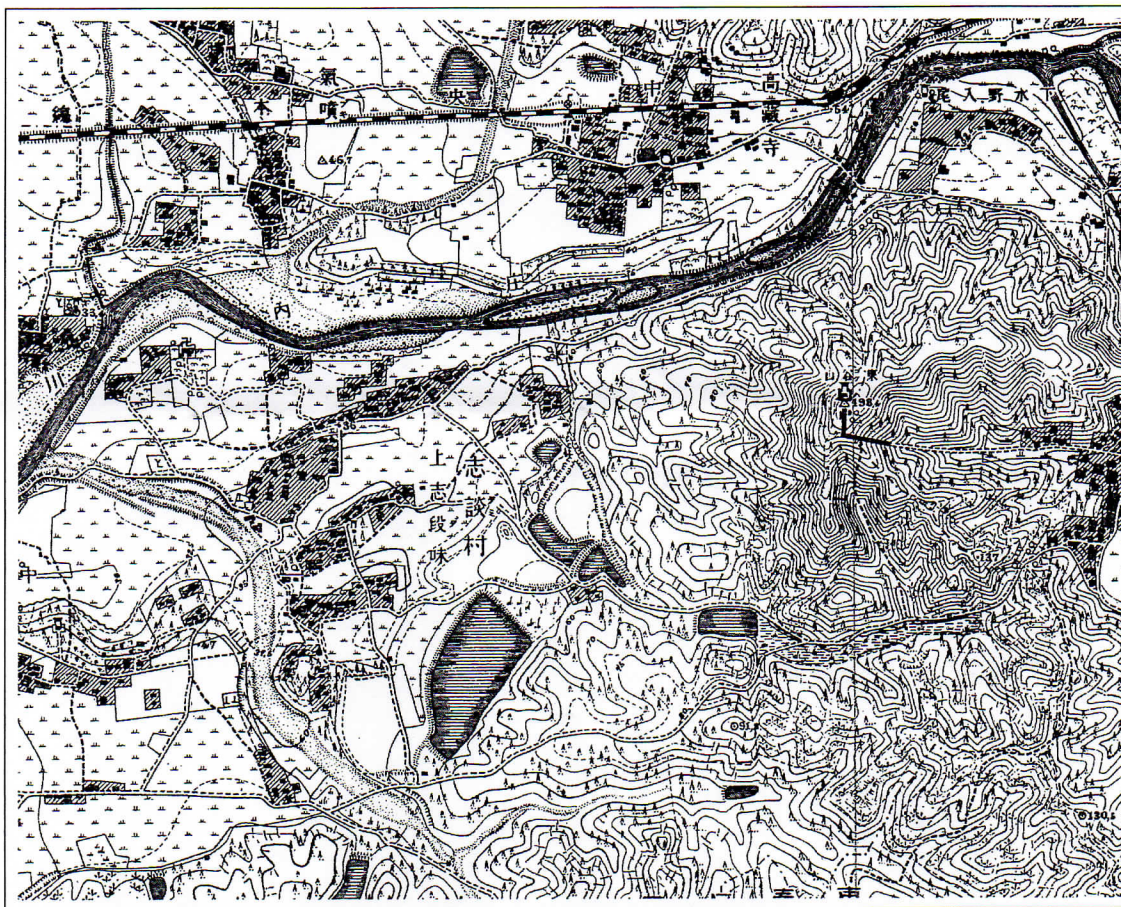


楽しくブラオワリ 地図を片手に歩く名古屋今昔

## 古墳の里の開発を見る

杉野 尚夫

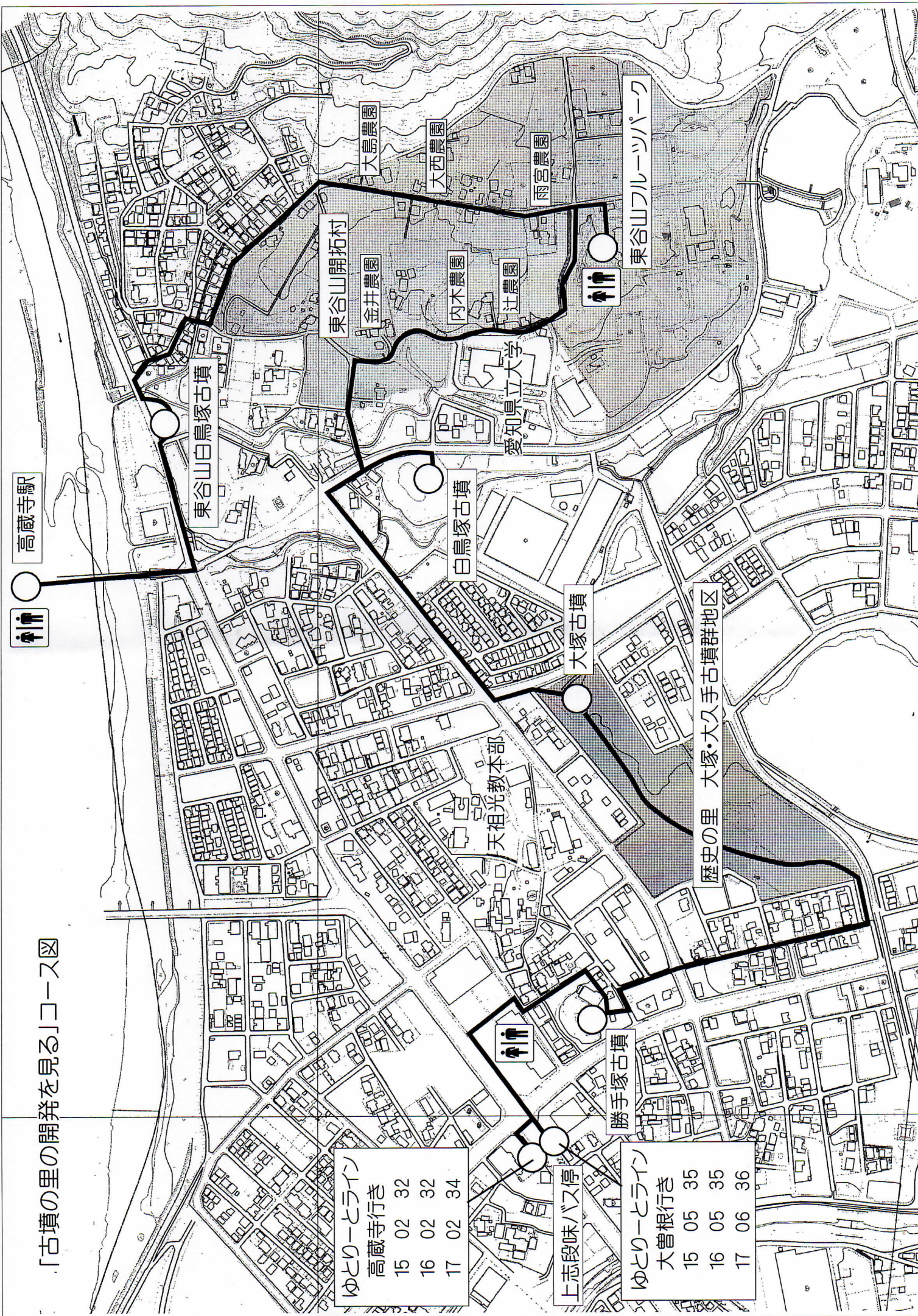
明治24年地形図（1/2万）



### コース概略

JR中央線高蔵寺駅改札口→東谷山白鳥塚古墳→東谷山開拓村→東谷山フルーツパーク  
→白鳥塚古墳→大塚古墳→歴史の里大塚・大久手古墳群地区→勝手塚古墳→ユトリート  
ライン上志段味バス停(約6km、2時間)

# 「古墳の里の開発を見る」コース図



| ゆとりーとライン |    |    |    |
|----------|----|----|----|
| 高蔵寺行き    | 15 | 02 | 32 |
|          | 16 | 02 | 32 |
|          | 17 | 02 | 34 |

| ゆとりーとライン |    |    |    |
|----------|----|----|----|
| 大曽根行き    | 15 | 05 | 35 |
|          | 16 | 05 | 35 |
|          | 17 | 06 | 36 |

## 1 志段味の由来

名古屋市域のうち東北に角（つの）のように突きだしたところが志段味地区。多くの名古屋市全図で、志段味地区の一部が切り取られて表示されている。東北のトンガリ部分が長方形の紙にうまくおさまらないのだからやむを得ないとは言え、気の毒な地域である。

『和名類聚抄』には、山田郡の郷の一つに「志誤」がある。「志誤」は「志談」の間違いで、これが志段味をさすというのが定説。だから志段味はかなり古い地名といえる。その後の文書には「志田見」の表記も見られ、シダミという読みに対していろいろな漢字が当てられている。

『尾張地名考』では、志段見村と表記されており「尾張山（東谷山）より瀝（したた）る水の幅が広く落ちる所で、瀝水（したみ）の意味で、垂水と同様」としている。

東谷山は、志段味地区の東端にある独立峰で標高195m、名古屋市内でもっとも高い地点。古文書には「當國山」と表記しているものもある。

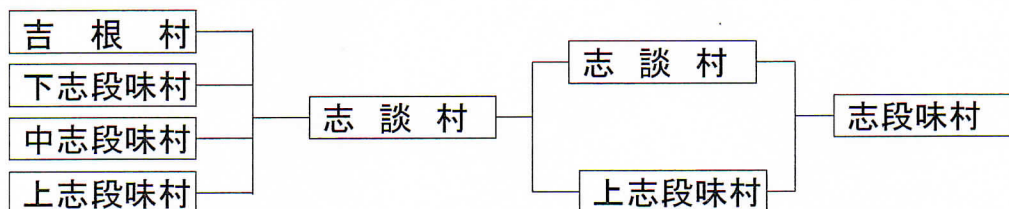
東谷山山頂にある尾張戸（おわりべ）神社は、延喜式神名帳に記載される「尾張戸神社」に比定されている。神社本殿は古墳の上に鎮座しており、この古墳を尾張戸神社古墳という。

社伝によれば、成務5年ミヤズヒメの勧請とされている。尾張戸神社の主神は、天火明命（あめのほあかりのみこと）で尾張氏の遠祖とされているので、当社は、古代豪族尾張氏と深い関係をもつとされる。

中世には荒廃したが、江戸時代になって、尾張2代藩主光友によって再建されたとされる。中社、南社の整備もこの時になされた。本殿は従来八幡造だったが、明治17年になって神明造に建て替えられた。

尾張戸神社はかつて下水野村（現瀬戸市）に属し、下水野村からつけられている参道が表参道ということになる。現在では、東谷山フルーツパークから中社、南社を経る散策路として整備されているほか、北側からは自動車道路が整備され、頂上すぐ近くまで車で行ける。このほかに、南側の愛知用水、東谷奇玉宮付近からも参道がつけられている。自動車道をのぞいていづれもかなり急な斜面を直登するコースであり、所要時間30分ほど、真夏には少々つらい山道である。

志段味地区は、江戸時代には、上志段味村、中志段味村、下志段味村、吉根（きっこ）村の4つの村に分かれていた。



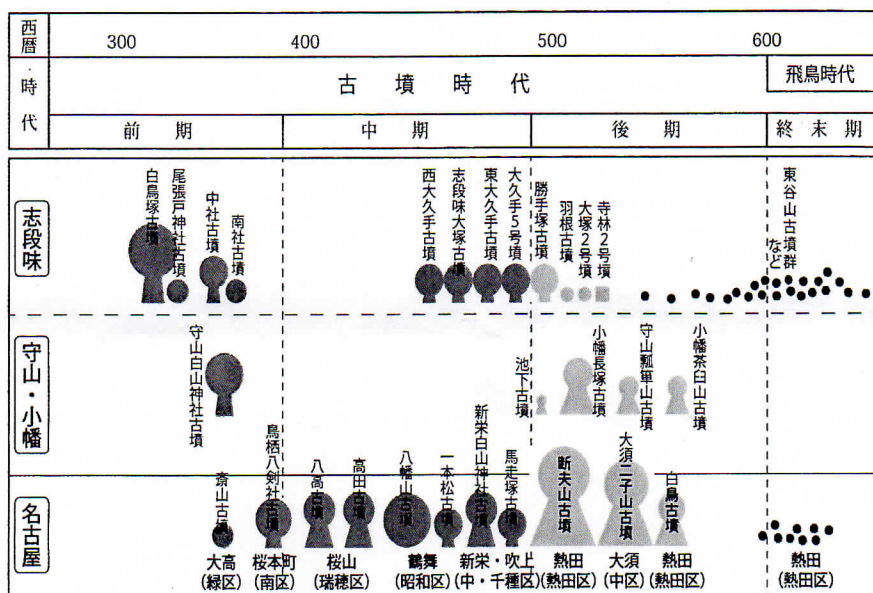
明治22年、4か村は合併して志談村となった。25年、上志段味が分離して、志談村と上志段味村となる。39年には再び両村が合併して志段味村になった。昭和28年になると町村合併促進法の動きに連動して志段味村は他町村との合併やむなしとの意向を固め、世論調査を行った。北隣の高蔵寺町あるいは南隣の旭町との合併が妥当と思われたが、村民の意

見は守山町との合併を望むものが圧倒的で、29年、守山町へ合併の申し入れを行った。守山町は愛知県の意向に従って旭町、志段味村との3町村合併で動いたが、旭町に合併の意思がなく、29年6月、守山町と志段味村の合併により守山市が誕生した。

守山市成立直後から名古屋市との合併の動きが始まり、昭和38年2月、名古屋市守山区となった。こうした経過により、時に「名古屋のチベット」と悪口される地区が市内に誕生した。

## 2 志段味古墳群

上志段味地区には、66基の古墳が集中しており、これを「志段味古墳群」と呼ぶ。33基が現存している。この数多い古墳が、東谷山山頂、山麓、河岸段丘を利用して造られ、すべてが東西1.7km、南北1kmの徒歩圏内という狭い範囲に存在している。



志段味古墳群の特徴は、古墳時代のすべての期間の古墳があることである。日本の古墳は、300年代から600年代までの比較的短い期間に造られているが、志段味ではこの全期間を通じて古墳が造られ続けた。名古屋市内あるいは周辺地域を見渡しても、これほどの数と時代幅のある古墳が集中する地域は他にない。

古墳の形も、前方後円墳、帆立貝式古墳、円墳、方墳の4種類が確認され、バラエティに富んでいることも特徴である。

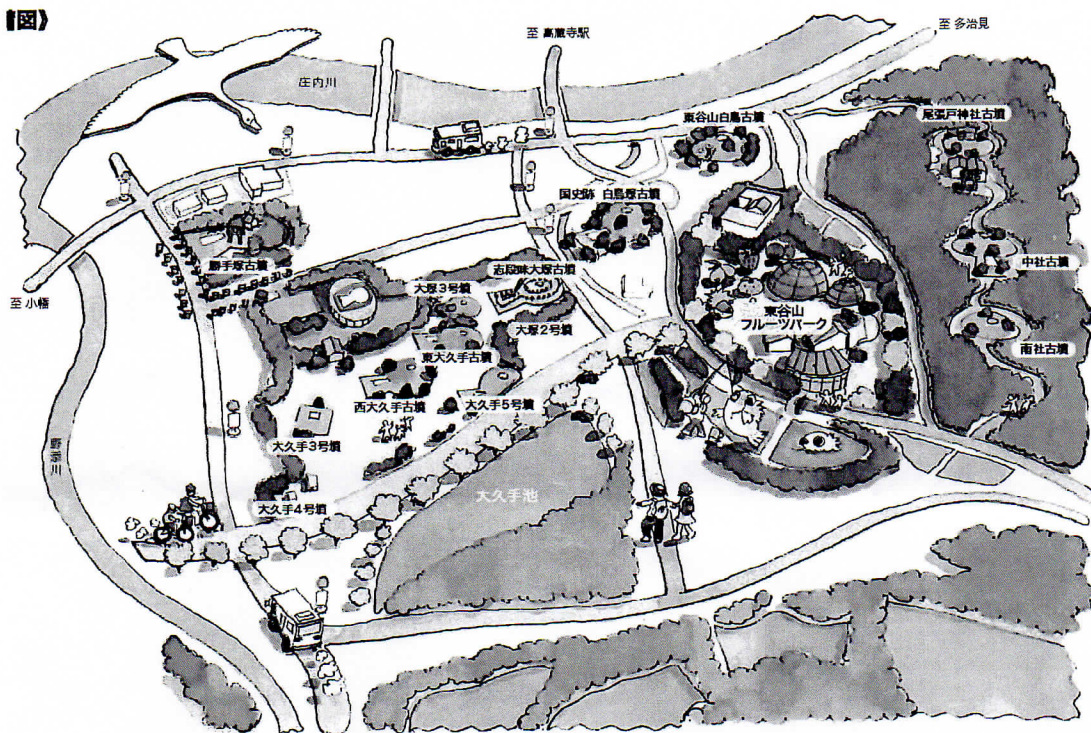
古墳時代前期（300～400年）に造られたものは、東谷山麓の愛知県立大学の西側にある白鳥塚（しらとりづか）古墳と東谷山上の尾張戸神社古墳、中社古墳、南社古墳の4つだが、このうち白鳥塚古墳は志段味古墳群の中で最大、最古のもの。墳丘長115mの前方後円墳でこれほどの規模と特色を持つ前方後円墳は尾張にはほかになく、尾張で最初に登場した、広域的な支配権を握る王の墓だとされる。

白鳥塚古墳は、伊吹山で傷ついたヤマトタケルを尾張まで背に乗せて運んだ白鳥の墓とする伝説がある。なお、白鳥塚古墳は国指定史跡になっている。

古墳時代中期から後期にかけて、帆立貝式古墳があらわれる。これは大久手池北側に集

古墳時代終末期には、横穴式石室を埋葬施設とする群集墳が造られるが、東谷山西側斜面に東谷山古墳群33基をはじめ、合計48基が確認されている。これ以外にも、名古屋城築城に際して石垣へ使うために石材を採取したり、戦後の東谷山麓開拓の際に消滅したものもあるものと考えられている。

【圖】



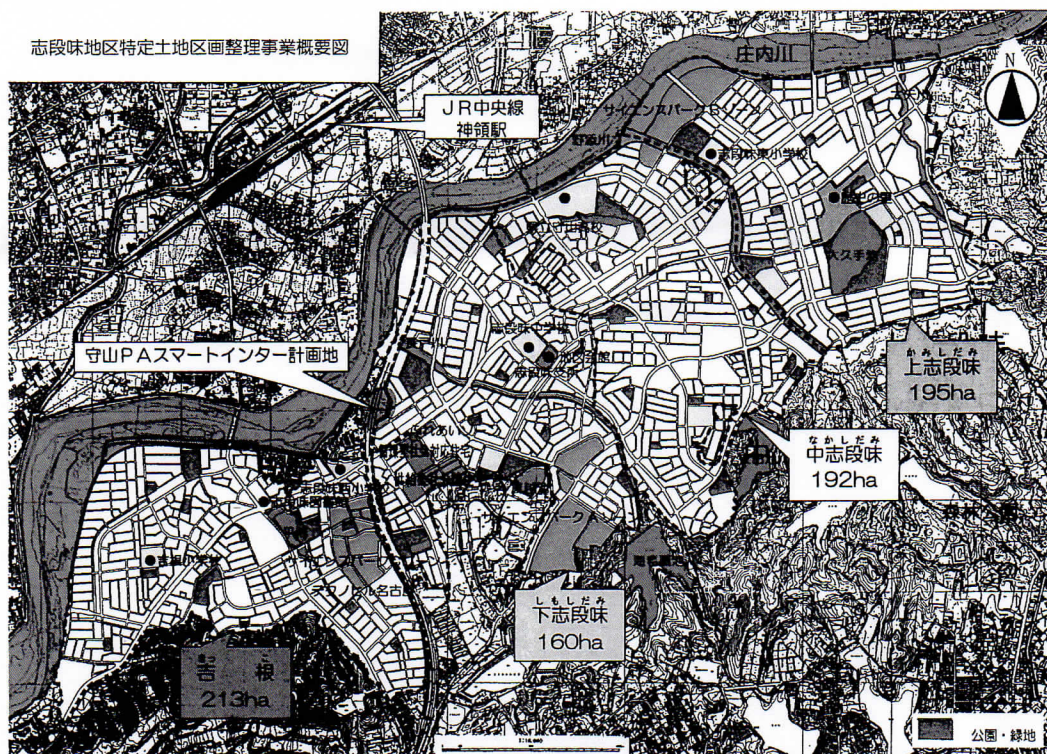
名古屋市内で後発となってしまった志段味地区の区画整理は、従前の土地価格が高いこともあって、事業費を確保するための保留地の売却に困難が予想された。このため、サイエスタウンの用地などを保留地として市が先行買収することで区画整理組合を助けよう

とするものだった。

こうして下志段味土地区画整理組合（平成4年設立）、上志段味土地区画整理組合（平成5年設立）、中志段味土地区画整理組合（平成7年設立）と、全域に区画整理組合が設立され、事業に入った。

サイエンスパークとして確保された3つのゾーンのうち、下志段味地区のAゾーンには中核施設として産業総合研究所、理化学研究所などが立地したものの、その後が続かずまだ空地が見られる。吉根地区のCゾーンは「テクノヒル名古屋」として民間の研究開発型企業の立地を促してきたが、ほぼ埋まった。問題は上志段味地区のBゾーンで、当初名古屋工業大学のキャンパスを予定していたが、同大学が進出を取りやめたため、この利用が宙に浮いた。市はこの利用について苦戦しているようだ。A、Bゾーンにしても、その周辺に期待された関連産業の立地は見られず、サイエンスパーク構想が成功したとはいえないようだ。

「歴史の里」も区画整理を助けるために、大規模保留地として古墳地区を市が買い取って整備をすすめているものである。



志段味全域の基盤整備はもうしばらくすると終わるが、住宅建築などはなかなかすすんでいない。あちこちに「土地売ります」などの看板が見られ、売値は坪あたり35～40万円程度と、隣接する春日井市、尾張旭市の相場に比べてかなり高い。名古屋市内という付加価値が含まれているとはいえ、交通至便とは言えないこの地区の地価としてはかなり高い。区画整理前の地価が高かったから仕方がないのだが。

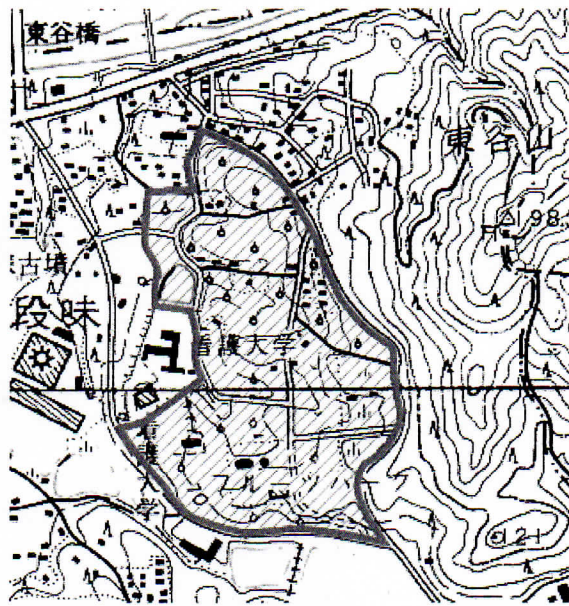
#### 4 東谷山開拓村

東谷山西麓に名古屋市の東谷山フルーツパークがあるが、その周囲にブドウ園が展開し

て、志段味地区の中で、開発から取り残されたような地区がある。東谷山開拓村の名残である。

太平洋戦争終戦直後の食料増産と失業対策のために全国で開拓入植が実施されたが、東谷山開拓村は、今日なお当時の面影を濃厚に残している珍しい例である。

昭和20年9月、東谷山の西麓の県有林、村落有林（合計約23ha）に18戸が開墾に入った。開拓者の出身地は、当時の志段味村2戸、守山町9戸、名古屋市7戸で、前職は農業1戸にすぎず、あとは軍人、商人、会社員、公務員など農業未経験者がほとんどだった。



開墾前のこの土地は、強酸性で腐植分の不足した不良土、地下水位は5m前後で、水利も大変悪かった。当初はサツマイモやソバなどの痩せ地に強い作物を植えたが、ほとんど収穫のない状態だった。土地を肥やすために、山の落ち葉を集めたり、市が回収したごみを運んでももらったり、高蔵寺や名古屋へし尿の汲み取りに出かけたりした。こうした努力で収量も少しずつ増加してきた。

入植当初の住宅は、高蔵寺弾薬庫や兵舎の古材を譲り受けたりして、ありあわせの資材でつくられた。生活用水はつるべ井戸に依存、渇水期には枯渇する井戸が多かったが、昭和49年に水道が引かれた。27年に電気が引かれてランプ生活から解放された。入植者の多くが日雇等の賃稼ぎをしたという。

入植した18戸のうち5戸が早い時期に離農し、その後33年までに2戸が入植し、定着戸数は15戸となった。土地は政府が買い上げ、27年、30年に入植者に売却された。

34年の伊勢湾台風で入植地は壊滅的な被害を受けた。建物のほとんどが被害を受け、家畜、耕地の被害は500万円にのぼった。開拓村は壊滅するかに見えたが、このことが刺激となって入植者の団結と努力が呼び起こされ、入植者全戸が営農に精進することを誓った。

土地は痩せているが、排水がよいことから果樹の振興が目論まれ、大学などの助言によりブドウが選ばれた。さまざまな農業振興資金の助けにより12.5haのブドウ園や集荷所が整備された。名鉄と提携して、全園ブドウ狩方式を取り入れ、観光農業を展開し、42年には9月1か月で3万人の入園者があったという。

51年になると名古屋市がフルーツパークを建設することになり、ブドウ園経営農家のうち4戸の全域がこの敷地にかかった。フルーツパークは55年に開業したが、離農者のうちの多くは果樹栽培技術を活かしてフルーツパーク勤務で収入を得ることになった。

東谷山フルーツパークは、果樹を中心とした植物観察や散策、果樹栽培の講習・相談など、多目的な利用ができ、季節毎にさまざまなイベントが行われて多くの来園者で賑わっている。

今年、ブドウ狩りができる農園は内木、辻、大西、大島の4農園。その他の農園は独自の農園経営をしている。その中では雨宮農園が花卉栽培を手広く展開している。

東谷山を背景にしたこれらの農園は、ここが名古屋市内であることを忘れさせるものであり、戦後の開拓に携わった方々のご苦勞を記念するものとして、このまま開発の手が及ばないでほしいと思う。

【次回】

平成31年3月21日（木）

小幡城から守山城へ

集合 13時30分 集合場所 名鉄瀬戸線小幡駅改札口

解散予定 15時30分 名鉄瀬戸線矢田駅

当日の緊急連絡先 杉野尚夫（講師）携帯 090-3153-6702

内山（毎日文化センター担当）携帯 080-1082-1024